

第七回星野立子新人賞

「聖五月の懺悔」

富士原志奈

上京初日春寒のワンルーム  
浅春の茶飲み話に死後のこと  
いつか去る人のかたはら春時雨  
薔薇の芽や咎責むるこの身にも咎  
けんかして一つ残れる桜餅  
俗名を呼ぶ声かすれ春の雪  
臃より出でて臃へ帰る人  
タイの文字踊るメニューやうららけし  
春灯や湯揉み棒より起こる波  
潜水艦浮上春潮脱ぐ如く  
微かなる風に捕らはれ飛花落花  
獄窓より見ゆるものみなかげろへり  
二の腕に薄き古傷夏隣  
夏来る噂話の給湯室  
拳闘ジム見学自由夏始  
クレーン伸ぶどこも五月の空にして  
定期入れ写真忍ばせ風薫る  
母の日や仕事樂しと嘘一つ  
卯の花腐し謝り癖の付きたる子  
喉仏震へ聖五月の懺悔  
夏潮の風余らせる岬かな  
爪を噛む癖治らざる朝曇  
双方の顔立たぬままアイスティー  
芭蕉布や島に伝はる流人帳  
万緑の底ひ一水ゆるやかに

独身のふりをしてゐるサンガラス  
地震の地の水の重さの西瓜かな  
切り損ねたる切札や秋暑し  
墓じまひ切り出せぬまま盆用意  
気ままなる風孕みをる芒原  
自画像の影深くつけ秋灯  
木犀の香や身籠らぬ身に深く  
深入りを許さざる眼や秋の宵  
月の道折り合へぬまま別れ来て  
点滴の光落ちゆき星月夜  
病窓に分かつ帰燕の空深し  
真相は被疑者のみ知る夜寒かな  
やや寒や見るあてのなきテレビつけ  
おほかたは要らぬものなり神無月  
両手よりそつと納むる古熊手  
震へをる拳下せぬ寒夜かな  
心音のトクンと十二月八日  
父帰らざるまま更けし聖夜かな  
まづ父を追ひ出してより煤払  
星薄く残る空より初鴉  
松納してすつぴんの如き門  
冬野より立ち上がるもの待ちにけり  
冬ざるる噛み合はぬまま話果て  
悪気なき言の葉刺さる寒夜かな  
ママチャリの母のハミング春隣